

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520241

研究課題名(和文) 国際的基盤形成を視野に入れた日本近代文学における内務省・GHQ検閲の研究

研究課題名(英文) A Study of Home Ministry and GHQ Censorship as it Relates to Modern Japanese Literature in Light of the Development of an International Foundation

研究代表者

十重田 裕一 (Hirokazu, Toeda)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40237053

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代日本文学の表現とメディア検閲とのかかわりを、第二次世界大戦前から戦中にかけて実施されていた内務省の検閲と戦後日本のGHQ/SCAPによる検閲の相互関連性に焦点を当てながら歴史的に研究することを目的としたものである。本研究では、二つのメディア検閲にかかわる資料を収集・整理し、日本国内外においてこれまで個々に研究が進められてきた感のある、内務省とGHQ/SCAPの検閲の関連に検討を加え、異なる二つのメディア規制と文学との特色を浮かび上がらせ、両者の相関性が明らかとなった。そのような研究成果の一部を、学術論文や著書にまとめ、さらに、国際シンポジウムでの発表、招待講演をそれぞれ行った。

研究成果の概要(英文)：The goal of this research project is to present a historical analysis of the censorship of literary expression and the media, especially as it was impacted by the mutually imbricated censorship apparatuses of the Home Ministry, prior to and during World War II, as well GHQ/SCAP in the post war period. For this project, I have gathered and collated materials relating to both of these censorship organs. While taking into consideration scholarship, both inside and outside of Japan, which has treated the implementation of censorship under the Home Ministry and GHQ/SCAP separately, I expand on such studies by considering the imbrication of the two censorship systems. Based on this, I have foregrounded these differing censorship systems and their characteristics when handling literature, while making clear the connections between them. I have gathered together and presented a part of these findings in scholarly articles and other written output.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学 メディア 検閲 占領期

1. 研究開始当初の背景

(1) 第二次世界大戦前後の日本で活動した文学者たちは、二つの異なる検閲下で作品を発表していた。一つは、明治時代から昭和前期まで帝国日本で実施されていた内務省の検閲であり、もう一つは、敗戦後日本の占領下で、1945年9月から1949年11月までアメリカ軍によって行われた、GHQ/SCAP (General Headquarters / Supreme Commander for the Allied Powers) の検閲である。以上の異なる二つのメディア規制と文学との特色を浮かび上がらせるべく、本研究では、昭和時代前期日本の文学に見られる内務省とGHQ/SCAPの検閲と文学の特色を、新資料を収集し分析しながら検討し、両者の相関性を考察した。

(2) 本研究を進めていくなかで、以下の二つの課題に直面することになった。一つ目は、文学研究の分野で、内務省とGHQ/SCAP検閲を関連づけた本格的な研究がないこと。二つ目は、日本文学と検閲に関する研究の成果を日本国内外で共有していないこと。こうしたこれまでの研究過程から、内務省の検閲と戦後日本のGHQ/SCAP検閲の相互関連性に焦点を当てながら歴史的に研究することを目的とし、その成果を国際的に共有するべく日本語と英語によって発信する必要性を強く感じるに至った。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、近代日本文学の表現とメディア検閲とのかかわりを、第二次世界大戦前から戦中にかけて実施されていた内務省の検閲と戦後日本のGHQ/SCAP検閲の相互関連性に焦点を当てながら歴史的に研究することを目的としている。

(2) 本研究では、文学にかかわる二つのメディア検閲の新資料を収集・整理し、日本国内外

においてこれまで個々に研究が進められてきた内務省とGHQ/SCAPの検閲の関連について検討を加えることで、新たな研究の基盤を形成し、その成果を国際的に共有するべく日本語と英語による発信を目指した。

3. 研究の方法

(1) 内務省の検閲と戦後日本のGHQ/SCAP検閲の相互関連性を研究するにあたって、両者の検閲に関連する資料が不可欠となる。内務省検閲については、最近公開された内務省委託本を中心に日本国内で資料収集を行う。GHQ/SCAP検閲については、アメリカ合衆国・メリーランド大学図書館プランゲ文庫所蔵の占領期の資料に基づいた。

(2) 研究を進めるにあたっては、内務省とGHQ/SCAPによる書き換えの指示のある校正刷・出版物・検閲文書を中心にしながら、必要に応じて、直筆原稿や執筆者・編集者の証言についても調査を行った。個別的な事例を疎かにすることなく、検閲の一つ一つを丁寧に掘り起こし、丁寧に吟味することが、本研究では重要と考えたからである。

(3) 内務省とGHQ/SCAP検閲にかかわる対象を選ぶにあたっては、20世紀前期に活躍した文学者を取り上げるのが効果的と考え、この時代に活躍した横光利一(1898~1947年)と川端康成(1899~1972年)を対象に研究を進めた。この二人は新感覚派の作家として出発し、第二次世界大戦の戦前・戦中・戦後に創作を発表し、両者ともに内務省とGHQ/SCAP検閲と少なからずかかわりを持つことになった。

(4) 本研究では、出版社及び出版人とのかかわりからの考察も有効と考え、研究の範囲を拡大し、岩波書店と岩波茂雄(1881~1946年)について調査し、考察を加えた。

4. 研究成果

(1) 研究成果を国際的に共有するべく、内務省と GHQ/SCAP 検閲の相互関連性を研究については、1940 年代日本のメディア規制と文学表現の葛藤に照明を当てて、カリフォルニア大学ロサンゼルス校において招待講演を行った。

(2) 内務省・GHQ/SCAP 検閲と横光利一の創作との関連については、彼の代表作である『上海』(改造社・1932 年、後に書物展望社・1935 年)を対象に考察を行った。この小説を取り上げ、内務省の検閲下における伏字と自主規制について分析を加えると同時に、それが占領下の検閲でどのように扱われたかを検討した。

(3) 横光利一については、直筆原稿に関する総合的な研究を進めるなかで、検閲の問題を取り上げた。具体的には、第二次世界大戦前・戦中に発表した小説・評論などの直筆原稿を対象に考察を行うことで、伏字との葛藤が原稿用紙にどのように刻印されているかを明らかにした。

(4) 川端康成については、内務省・GHQ/SCAP 検閲のメディア規制と小説の表現との関連について考察した。具体的には、戦後の『朝日新聞』に連載された新聞小説をとりあげ、内務省の検閲の記憶と占領下の検閲の相克がメディアに対してどのような作用を与えたのかを分析した。

(5) 岩波書店及び岩波茂雄については、内務省・GHQ/SCAP のいずれの検閲とも深くかわる。そうした出版人と出版社と検閲との相克を考察の対象とし、それに関する分析を含む研究成果を、評伝という著書のかたちでまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌等論文](計 9 件)

十重田裕一「占領期日本の出版検閲と横光利一 プランゲ文庫の調査から」『大東文化研究』第 79 号、韓国成均館大学校大東文化研究院、pp.45-61、2012 年、査読無(依頼)

十重田裕一「『浅草紅団』の新聞・挿絵・映画 川端康成の連載小説の方法」『文学』第 14 巻第 4 号、岩波書店、pp.123-141、2013 年、査読無(依頼)

十重田裕一「岩波茂雄の新聞活用術」『図書』第 772 号、岩波書店、pp.12-17、2013 年、査読無(依頼)

十重田裕一“L'ESPERIENZA E L'OPERA DI SCRITTORI VITTIME DI CATASTROFI NATURALI”, SCRIVERE PER FUKUSHIMA (「被災した作家の体験と創作-新感覚派の関東大震災」), Atmosphere libri, pp.133-147, 2013 年、査読無(依頼)

十重田裕一「植民地を描いた小説と日本における二つの検閲 横光利一『上海』をめぐる言論統制と創作の葛藤」紅野謙介・高榮蘭・鄭根埴・韓基亨・李惠鈴編『帝国の検閲 文化の統制と再生産』新曜社、pp.241-251、2014 年、査読無(依頼)

十重田裕一「草稿から出版へ 横光利一の直筆原稿を手がかりに」日本近代文学館編『近代文学草稿・原稿研究事典』八木書店、pp.241-251、2015 年、査読無(依頼)

十重田裕一「横光利一」日本近代文学館編

『近代文学草稿・原稿研究事典』八木書店、
pp.380-383、2015年、査読無（依頼）

十重田裕一「松本清張と新聞小説」（『松本清張研究』第16号、北九州市立松本清張記念館、pp.30-40、2015年、査読無（依頼）

十重田裕一「二〇一四年秋、パリ、国際シンポジウム」（『日本近代文学』第92号、日本近代文学会、pp.153-158、2015年、査読無（依頼）

〔学会発表等〕（計2件）

十重田裕一「占領期言語統制下の創作と出版活動」Colloque international Université Paris Diderot（川端康成パリ国際シンポジウム）2014年9月18日

十重田裕一“Media Regulations and the Battle Over Literary Expressions in 1940s Japan.”（1940年代日本のメディア規制と文学表現の葛藤）University California Los Angeles（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）2014年11月17日

〔図書〕（計1件）

十重田裕一『評伝 岩波茂雄 低く暮らし、高く想ふ』ミネルヴァ書房、pp.1-307、2013年

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕（計1件）

十重田裕一「書評・日高昭二著『占領空間のなかの文学 痕跡・寓意・差異』」（『神奈川大学評論』第80号、神奈川大学、p.156、2015年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

十重田 裕一（TOEDA, HIROKAZU）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：40237053

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし